

三従四徳

陳 競 鳶（福井大学大学院工学研究科）

木の肌に体を押し付けてずり登り、枝に手がかかった途端「女の子だから、木登りはヤメロー」と、祖父の低い声で体が固まりました。泣きながら帰る私を、祖母が「木登りは楽しいよね」と慰めてくれました。小学生になる前の夏のできごとです。危険なことは面白いし、危険に打ち勝った時の喜びは爽快です。しかし世の中の自然の動きは、祖父の声に代表されていることに痛感します。

小学校3年生のとき、文化大革命に遭遇しました。私は正規の教育を受けずに高校の卒業証書もらい、家から遙か遠くの山村へ連れて行かれ、農村教育を受けました。当時の政府は「上山下郷（毛沢東の理論教育に加えて、貧しい農民から実践教育を受ける）」という方針の下で、1600万人余りの若者たちを都市から山村へ移住させました。17才前後の私達は全員、男女の分別ができない緑色の解放軍服を着させられ、無理やり農民と一緒に働かされました。今でも脳裏に焼き付いている恐ろしい記憶は、50kgを超えた発酵糞肥料を天びん棒で担いで、山の棚田への列をなす運搬作業です。「修地球（地球の修理）」と言われていた作業でした。作業の原則は文字通りの男女平等なので、小柄な女子には命がけの作業でした。「平等」の裏に潜む抑圧が、正々堂々とまかり通る時代でした。人それぞれに備わった宝(gift)について思いめぐらす日々でした。自分に備えられたものは何かを求めて、10年ぶりの1977年に再開された大学入試に臨みました。

孔子の教えに積極的な女性論は見当たりませんが、近代に展開した儒教の中に「三従四徳」という戒めがあります。三従とは「在家従父、出嫁従夫、夫死従子」（嫁に行くまでは父親に従い、嫁に行ったら夫に従い、夫が死んだら子供に従う）、四徳とは「婦徳、婦容、婦言、婦工」（女性らしい道徳、女性らしい容姿、女性らしい言葉遣い、料理や裁縫の技術）を身につけることを言います。その習慣の中で育った私は、1989年の春、夫の意見に従って天津大学の大学院予備学校に入り、修士課程入学試験の勉強を始めました。しかし、同年6月に天安門事件が起こり、4才の娘の教育も不安な状態になりました。そこで天津で学位を取る方針を、海外へと変更しました。1990年4月に来日し、私費留学生として福井大学生物化学科の研究生になりました。家族に支えられて、今から17年前に博士学位を取ることができました。その後、株式会社前田工織に勤め、金沢大学理学部化学科の講師、アメリカのユタ大学化学科の私費訪問学者を経て、今は福井大学大学院工学研究科物理工学専攻の准教授です。今年の6月、ポーランドで開催した第9回 ECHEMS 学会から招待され、「Voltammetry of hydrogen bubbles, latex particles and oil droplets」の題で講演をし、ヨーロッパの科学者、若い研究者たちと長時間にわたる討論をする機会

に恵まれました。「三従四徳」は決して頭から否定するものではなく、どのように活用するかが決め手です。

では、「三従四徳」を女子学生へのメッセージとして使えるでしょうか。答えは単純ではありません。今の中国の学生は一人っ子ばかりなので、「四徳」どころか零徳女性も見かけます。社会が安定するうえで「四徳」くらいの教育は必要です。家庭で「四徳」を教えないから、研究室では四徳の実践教育をしています。研究室に23人の卒研究生と大学院生がいます。その中の10人が博士後期課程の学生です。20代の女子博士後期課程学生の生き方を覗いてみました。

北朝鮮との国境に近いところにある美しい長白山で生まれた侯永丹氏は、次の言葉を語っています。「做科研要像做艺术一样（科学研究をすることは芸術をすることと同じ）、去欣赏它（科学研究は鑑賞に値する）、赋予它生命（科学研究は命を与える）、而不是为了做科研而做科研的去完成任务（形を整えるための研究は研究ではない）。」「把自己的人生做成一件独一无二的艺术品（自分の人生は唯一の芸術品だ）。」

黒龍江の水で育った李春艶氏：「私は博士号を取るために勉強する理由が二つあります。一つは研究が面白いからであり、もう一つは、将来の仕事を見つけるのに必要な特権と技術のためです。博士学位を取った後、私は電気化学の研究をやっていきたいと考えています。未来がどうなるかに関係なく、私は社会に貢献するために最善を尽くすつもりです。」

天津出身の王洪欣氏と南国出身の肖飞飞氏は似た考えを持っています。「一度きりの人生で、自分が責任を持って、後悔しないように生きていきたい。これが今の私の目標です。」

今、私たちが女性科学者としてできることは、自然の謎を解く中で自然の美しさを追い求めて感動する若い研究者を育てることです。また、若い研究者とその喜びを共有することです。遠くのゴールを見据えながら、



Figure 1. お花見にて（前列左から王洪欣氏、筆者、李春艶氏、肖飞飞氏、侯永丹氏）。